令和四年五月

漢詩鑑賞

**小　園**

**小園煙草接隣家　　の　にし**

**桑柘陰陰一徑斜　　としてなり**

**臥讀陶詩未終卷　　してをんでだをえざるに**

**又乘微雨去鋤瓜　　にじてきてをく**

【通釈】起句　わが家の小さな畑のは、雨の中でにつつまれて隣の

　　　　　　　屋敷までつづいており、

　　　　承句　桑畑には桑の木々がこんもりと茂り、その間を一本の小道

　　　　　　　がななめに走っている。

　　　　転句　(雨が降って来たので)ねころんで陶淵明の詩を読んでいた

　　　　　　　のだが、まだ一巻を読み終わらぬうちに、

　　　　結句　また小降りになったので、出かけて行って瓜畑を耕すこと

　　　　　　　としよう。

【語釈】　小園　　小さな畑

　　　　　煙草　　もやにつつまれた草

　　　　　草柘　　くわ、柘はやまぐわ。

　　　　　陰陰　　木が茂って暗いさま。

　　　　　陶詩　　陶淵明(三六五－四二七)の詩。

　　　　　　　　　陸游は若年の頃から陶淵明に深く傾倒していたと伝え

　　　　　　　　　られる。

　　　　　終巻　　一巻を読み終える

　　　　　乘微雨　　雨が小雨になったのを機会に

　　　　　鋤瓜　　瓜畑を鋤く。瓜畑を耕し雑草を除く意。

【押韻】　平声、麻韻。家、斜、瓜。

【解説】　陸游（一一二五－一二〇九）は､南宋の大詩人。憂国正義の人。

　　　　　この人の詩は今年一月にも鑑賞した。

　　　　　此の詩は作者五八歳の時、故郷山陰(浙江省紹興)での作。この前年陸游は官職にあり、任地の撫州(江西省)に居た時その地方に水害による飢饉があり、上司の命を待たずに官有米を農民に与えたとして罪を得、自身三度目の免職に逢い、故郷に帰り、苦しい生活を余儀なくさせられていた。

　　　　　詩は、何事もない、平穏な晴耕雨読の生活を詠じたものとして鑑賞しても美事な作品ですが、右のような背景の下に再読すれば、作者の強靱高潔な精神と矜恃に一層深く触れさせてくれる佳作です。